

〔共同研究：天変地異の社会学 III〕

再考・天変地異¹⁾

串 田 久 治

一 東日本大震災からみえるもの

近年、世界は異常気象に見舞われている。また、頻発する地震、干魃と集中豪雨、火山の爆発などなど、天変地異は日本だけのことではない。世界各地で猛暑の被害が発生し、その一方で猛烈な寒波に襲われて人々を苦しめている。しかしながら、いずれの国でも為政者は自然の猛威になすすべを知らない。ただただ圧倒されるだけで、全く無力である。

近年の異常気象と自然災害の頻発は、もっぱら環境破壊による地球の温暖化が原因だという。その当否はさておき、自然災害は人間の歴史とともに古い。中国では自然の異常現象は地上の政治の反映、意志ある天が人間世界に下した災禍、異常気象も天災もすべて地上の政治が正しく機能していないことの証だと考えられた。

このような天災観念は、自然界と人間界とが相関関係にあるとする自然観に基づくため、必ずしも中国に限らず、日本や朝鮮、あるいはインドネシアにも似た考え方が散見する。2005年4月より開始した共同研究「天変地異の社会学」は、中国（儒教及び仏教）・日本・韓国・インドネシアを対象国とし、それぞれの地域の天変地異の異相を比較研究することによって、東アジアにおける災害思想を中国・日本・朝鮮・インドネシアという横の広がりだけでなく、儒教と仏教（中国）、朝鮮朝と植民地期（朝鮮）、古代ジャワとインドネシアというように、同一地域にありながら全く違った様相を見せる縦の視座にも注目し、歴史的・文化的に解明しようとして生まれた。その研究成果の一部はすでに公表している。

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震、それによって東北地方から関東地方にかけての太平洋沿岸部に押し寄せた大津波、地震直後に発生した大火災、さらに地震と津波によって起きた福島原子力発電所の事故のニュースは、瞬間に世界中の人々の知るところとなった。

日本のテレビや新聞は、これほど凄惨な震災や原発事故に遭遇したにもかかわらず、略奪も暴動も起こさず、パニックに陥ることなく整然と対応する日本人を世界中が賞賛している

1) 本稿は、桃山学院大学共同研究「天変地異の社会学 II」（2008年4月～2011年3月）の研究成果の一部である。

キーワード：天変地異，天人相関思想，災異説，董仲舒，劉向

と伝え、日本人のモラルの高さを誇らしげに伝えた。また、家屋を失った人々、あるいは放射能の影響で退去を余儀なくされた人々がいかに従順で忍耐強い、いかに協力的か、東日本大震災と、日本人のすばらしさを喧伝し続けた。

しかし、なぜ日本人は暴動を起こさないのだろうか。なぜ日本人はこれほど悲惨な状況をひたすら我慢するのだろうか。天災だから悲しみや苦しみを押し殺すほかないのだろうか。そもそも本当に自然の災害なのだろうか。

筆者はそこに日本人の天災観——天変地異は人知を超えた自然現象、だから天災は誰の責任でもない、仕方がないとする一種の命定論——をみることができると考える。

儒教を国家統一の原理とした中国では、儒教の災異説が定着していたため、天変地異が人々の現実政治批判を喚起することはあっても、天変地異を命定論によって理解することは浸透しなかった。儒教文化を積極的に受容してきた日本人に、なぜ災異説による天変地異解釈が根付かなかつたのだろうか、また、災異説は非科学的な異国の過去の遺産でしかないのだろうか。私たちは天変地異とどう向き合うことができるか、改めて問い直すべき好機ではないだろうか。

二 儒教の災異説

科学の未発達な古代中国では、自然の恵みを「天賞」と称する一方、自然災害を「天禍」と称し、意志ある天が人間世界に下した天譴であると説明した。自然の摂理を遵守すれば国政は正しく機能し、天はそれを祝福して「天賞」を下す。逆に自然を無視する国家には、天は災害や異変という「天禍」下して統治者を譴責する²⁾。すなわち、天変地異が現実の政治や社会に対する批判精神を喚起し、天変地異を天の人間界に対する譴責であると認識していた。

自然現象を善政か失政かのバロメーターとする考え方は、『尚書』のいわゆる「洪範九疇」の第八「休征」及び「咎征」にも見える。統治者に五徳（恭・従・明・聡・睿）が備われば、おのずから肅・乂・哲・謀・聖として外に現れる。そうすれば、天は統治者の徳に感じて雨・陽光・暖・寒・風という天の恵みを地上にもたらす。逆に、統治者に五徳が備わらないと凶兆が現れることになる。「休征」は全面的に自然の恵みとなって五穀豊饒を約束するが、「咎征」は自然の法則に反する異常現象となって現れ、天が人事の不正に順応して下した罰となる³⁾。

このように、自然現象は善くも悪くも現実政治の応驗としてとらえられ、それゆえ天道

2) 唯聖人知四時。不知四時，乃失國之基。不知五穀之故，國家乃路故天曰信明，地曰信聖，四時曰正，其王信明聖，其臣乃正。何以知其王之信明信聖也，曰慎使能而善聽信之。使能之謂明，聽信之謂聖，信明聖者，皆受天賞，使不能為愆，愆而忘也者，皆受天禍。（『管子』四時）

3) 八，庶征，曰雨，曰暘，曰燠，曰寒，曰風，曰時。五者來備，各以其叙，庶蕃廩。一極備凶，一極無凶。曰休征，曰肅，時雨若，曰乂，時暘若，曰哲，時燠若。曰謀，時寒若。曰聖，時風若。曰咎征，曰狂，恆雨若。曰僭，恆暘若。曰豫，恆燠若。曰急，恆寒若。曰蒙，恆風若。

(自然)の「休」と「咎」とを見て人事(政治)の得失の判断材料とする。

このような考え方は東アジアの儒教文化圏では今なお生きている。多くの「自然災害」は、実は自然を征服することこそ発展だとしてきた近代の負の遺産であること、異常渇水、水害、山崩れ、土石流等々、被害が発生するたびに「乱開発」が指摘されるように、「自然災害」とはまさに貧困な政治がもたらした結果(人災)だということだ。にもかかわらず、日本人には「天災には勝てない」という諦観が蔓延しており、為政者も自然災害は誰のせいでもない、ましてや政治的責任などあろうはずがないと考えている。

さて、祥瑞は現実の政治が正しく行われていることの証である⁴⁾ように、災害異変は政治の過誤の証であるとし、為政者の政治的責任を追求するのが董仲舒の災異説である。

臣、謹みて春秋の中を案じ、前世已行の事を視て、以て天人相與の際を觀るに、甚だ畏る可きなり。國家、將に失道の敗有らんとすれば、天、乃ち先に災害を出して以て之れを譴告す。自ら省みることを知らざれば、又た怪異を出して之れを警懼す。尚お變を知らざれば、傷敗乃ち至る。……臣聞く、天の大いに奉じて之れをして王たらしむる所は、必ず人力の能く致す所に非ずして自ずから至る者有ればなり。此れ受命の符なり。天下の人、心を同じくして之れに歸すこと、父母に歸するが若し。故に天瑞、誠に應じて至る。書に曰く、「白魚、王の舟に入る。火有り、王屋を復おほい、流れて烏と為る」と。此れ蓋し受命の符なり。周公曰く、「復かえるかな、復かえるかな」と。孔子曰く、「徳は孤ならず、必ず鄰有り」と。皆な善を積み徳を累かさぬるの效なり。後世に至り、淫佚衰微するに及び、羣生を統理すること能わず、諸侯背畔し、良民を殘賊して以て壤土を争い、徳教を廢して刑罰あたに任ず。刑罰、中らざれば、則ち邪氣を生じ、邪氣、下に積めば、怨惡、上に畜む。上下、和せざれば、則ち陰陽謬盪して妖孽生ず。此れ災異の縁りて起る所なり。(『漢書』董仲舒傳)

言うまでもなく董仲舒は『春秋公羊傳』の解説をもとに災異説を展開するが、この災異説はそれまでの天人相関思想を大きく変えた。天の命を受けて絶対的権力を賦与された天子を、天は同時にその天子の政治を監視しているということになり、災異の責任は統治者に帰せられることになるのだから。すなわち、災異説には漢王朝の体制を保守する儒教一尊理論のアンチテーゼとしての、体制を批判する抵抗の思想を用意したことになるからである。

また、「其れ大畧の類、天地の物、常ならざるの變有るは、之れを異と謂う。小なる者、之れを災と謂う。災は常に先に至りて、異は乃ち之れに隨う。災は天の譴なり。異は天の威なり。之れを譴して知らざれば、乃ち之れを畏すに威を以てす。詩に云う、『天の威を畏る』

4) 子曰、鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫。(『論語』子罕)、楚狂接輿、歌而過孔子曰、鳳兮、鳳兮、何徳之衰。往者不可諫、來者猶可追。已而、已而、今之從政者殆而。(同、微子、及び『莊子』人間世篇)、古之王者、有務而拘領者矣、其政好生而惡殺焉。是以鳳在列樹、麟在郊野、烏鵲之晴巢可俯而窺也。君不此問、而問舜冠、所以不對也。(『荀子』哀公篇)。

と、殆ど此の謂いなり。凡そ災異の本、盡く國家の失に生ず。國家の失、乃ち始めて萌芽し、而して天、災害を出し、以て之れを謹告す。之れを謹告して變を知らざれば、乃ち怪異を見して以て之れを驚駭す。之れを驚駭して、尚お畏恐を知らざれば、其の殃咎乃ち至る」(『春秋繁露』必仁且知篇)ともいうように、董仲舒は天子の絶対化を図り中央集権國家の指導原理とした儒教が、同時に肥大化する君主権を抑制して政治の横暴を責め君主の放恣を監視する理論を打ち出している。

この災異思想は前漢思想界を風靡した。例えば、桓寬はその著『鹽鐵論』に次のように記している。

古者、政に徳あれば、則ち陰陽 調い、星辰 理まり、風雨 時あり。故に行を内に修めて、声、外に聞こえ、善を下に為して、福、天に応ず。周公載紀に、「天下太平にして、國に夭傷無く、歳に荒年無し。此の時に当たり、雨は塊を破らず、風は條を鳴らさず。旬にして一たび雨ふり、雨、必ず夜を以てし、丘陵・高下と無く皆な熟す(水旱第三十六)

有徳の政治が行われると、陰陽のバランスが崩れないため天体の運行は狂わず、風も雨も時節を得て適度に吹き適度に降る。それゆえ、内に行った個人的善行が必ず名声となって外に聞こえるように、天が地上の善政に感應して幸いをもたらすというのである。

このように、董仲舒の災異説は政治の横暴を責め君主の放埒を抑制することを目的としたものであった。そして、それは具体的にはそれまでの政治を総点検することを意味した。

三 儒家の天変地異解釈

『尚書』に「日月星辰を歴象し、人時を敬授す」(堯典)とある。これは堯が天文に通じた羲和を天文官とし、太陽・月・星辰を観測して農耕に益ある暦を制するように命じたというもので、周王朝にはすでに天文観測がなされていたことを裏付けるものである。また、『周易』に「天文を觀て時變を察す」(賁卦・彖傳)と見えるように、天文は変化の法則を知るために欠くべからざる観測の対象と認識されていた。それは、「天、神物を生ずれば、聖人、之れに則る。天地變化すれば、聖人、之れに效う。天、象を垂れて吉凶を見せば、聖人、之れに象る」(繫辭上)と、天の千変万化が吉凶を示していると考えたからである。要するに、日月星辰の運行を観測するのは、それによって四季の変遷を推察するためであり、より客観的な自然の法則を天文観測から獲得しようとする、原始的ではあるが科学的な精神のあらわれということができる。

さて、『周易』に「仰ぎては以て天文を觀、俯しては以て地理を察す」(繫辭上)とあるように、「天文」と「地理」は一体であった。古代人にとって日蝕や月食、彗星や流星、あるいは惑星の異常運行など、天文の異変は精神的に不安をもたらす脅威であったが、それらが

日常生活に大きな実害を与えることはない。しかし「地理」における災異の実害は天文現象の比ではない。とりわけ地震は今の科学をもってしても予測できない脅威である。「地震う」こと自体が人々を恐慌に陥れるばかりか、地震の後に続く災害（家屋の倒壊、水害、山崩れなど）が深刻で、そのたびに多くの人命を奪い、収穫に打撃を与えて経済を破綻させ、日常生活を不可能ならしめる。災異を天の譴責とする災異説にとって、地震は最も説得力のある凶事（不幸）であった。

『春秋』二百四十余年間には、文公九年・襄公十六年・昭公十九年・同二十三年・哀公三年の五例の地震が記録されており、『漢書』五行志下之上はこれら五回の地震を劉向の解説を引用しながら原因と応徴を詳述し、いずれの地震も天が過去および現在の失政を戒めたもの、そのため不幸に見舞われたとする。

ところが、同じ『漢書』五行志下之上に記録される西漢時代の地震解説には、地震もまた天文の異常現象と同じように政治的過誤に対する天譴であるとするだけの、説得力のある説明が見られない。その中で文帝元年四月と成帝河平三年二月の地震解説は興味深い。

文帝元年四月、齊・楚の地の山二十九所、同日に俱に大いに水を發し、潰れ出づ。劉向以為えらく、「水、土を滲るに近きなり。天、戒しめて若く曰く、『齊・楚の君を盛んにすること勿れ』と。今、制度を失し、將に亂を為さんとす」と。後十六年、帝の庶兄齊悼惠王の孫文王則薨じ、子無く、帝、齊の地を分かちて、悼惠王の庶子六人を立てて皆な王と為す。賈誼・鼂錯諫む。以為えらく、古制に違い、亂を為さんことを恐ると。景帝三年に至り、齊・楚七國、兵百餘萬を起し、漢、皆な之れを破る。春秋、四國同日に災あり、漢、七國同日に衆山潰れ、咸な其の害を被むるは、天の威を畏れざるの明效なり。

成帝河平三年二月丙戌、犍為の柏江の山崩れ、捐江の山崩れ、皆な江水を靡ぎ、江水逆流して城を壊ち、十三人を殺す。地震うこと二十一日を積ね、百二十四たび動く。元延三年正月丙寅、蜀郡の岷山崩れ、江を靡いで江水逆流し、三日にして乃ち通ず。劉向以為えらく、周の時、岐山崩れ、三川竭れ、而して幽王亡ぶ。岐山は周の興る所なり。漢家、本蜀漢より起こる。今、起こりし所の地、山崩れ川竭れ、星孛又た攝提・大角に及び、參従り辰に至る。殆んど必ず亡びん。其の後、三世、嗣亡く、王莽、位を篡う。

文帝元年（前179）四月に齊と楚で発生した地震を、劉向は文帝が「制度を失し」たことに対する天の応徴であり、二十数年後に起きた呉楚七国の乱は「天の威を畏れざる」結果であるという。また、河平三年（前26）二月に起きた犍為郡の地震と山崩れ、元延三年（前12）正月に起きた蜀郡の岷山の山崩れを、劉向は「其の後、三世、嗣亡く」、すなわち成帝・哀帝・平帝の三世に後継者が育たず、王莽が漢王朝を篡奪する予兆であったと解説している。

地震の予占化は東漢になるといっそう顕著で、しかも極めて合理的に説明される。東漢の地震記録は西漢の三倍以上、そしてそれは和帝に始まる⁵⁾。そして、すべての地震の原因は皇后あるいは皇太后、外戚や宦官の専権や陰謀を天が予告していたとして、整合性をもって具体的に解説される⁶⁾。すなわち、陰陽の「陰」に相当する皇后・皇太后・外戚・宦官を原因とする方向性が明確に打ち出されているのみならず、地震の原因を作った者には将来ことごとく不幸が下るであろうことを暗示している。まさに李固の対策という「陰類専恣して、將に分離の象有らんとし、郊城に附す所以は、是れ上帝、象を示して以て陛下を誡むるなり」⁷⁾に総括される。

そして、それは春秋緯に散見する地震占い、「地面動搖すれば、臣下、上を謀る」(『春秋緯潜潭巴』)、「后族、權を専らにすれば、地動きて宮を搖るがす」(『春秋緯運斗樞』)、「大夫、權を専らにすれば、地 裂坼す」(『春秋緯漢含孳』)、「地坼ければ、陰畔して靜ならず、陽、施されず、臣下 専恣す。故に天下、謀を以て主を去る」(『春秋緯演孔圖』)や、「天は動にして地は靜なるは常なり。地動くは、陰、陽の行を為すに象^{かたど}」(『公羊傳』文公九年何休注)などの地震観とも重なる。

四 天変地異とどう向き合うか

一般に、災異説は西漢末に「予占化」し、体制擁護のための讖緯説へと変貌したとされる。その後、王莽の符命による漢王朝篡奪、そして光武帝の讖緯による漢王朝復興を経、何休により加速度的に強化された災異説の予占化は、専ら天子の正当性を強調してそのカリスマ的権威を確立するためのものとなり、本来の災異説の意味を喪失してしまったかのようなのである。

しかしながら、たとえ統治者が災異の神秘を権威の道具にしようと、自然災異に対する人々の不安や恐怖が消え去るわけではない。日食や月食、惑星の異常運行、あるいは彗星や流星の出現など、自然の異変が神秘のベールを脱いで人々から恐怖心を取り除くには、近代科学の進歩を待たねばならなかった。

確かに、天文異変も歴代の天子に猛省を促し、天の意に応えようと善政を施すべく政策を出す効果もなかったわけではない。しかし、ひとたび地上に災異が起ると、天文異変のように統治者が猛省するだけではすまされない。宣帝が地震の被災者からの租税徴収を禁止し、哀帝が租税免除の詔を発したように、すぐさま具体的な被災者救済策を必要とする。「自然災害だから仕方がない」と、手をこまねいているわけにはいかない。その意味で、地震は統治者にとっても最も恐ろしい天譴であったはずだ。地震が人々にもたらす被害の大きさが、

5) 西漢の地震記録は二十四回(王莽の時の二回を加えても二十六回)であるのに対して、東漢では計八十九回にのぼる。和帝の六回を皮切りに、安帝二十六回、順帝十二回、桓帝十八回、靈帝九回、獻帝六回と、異様な多さである。

6) 拙稿「古代中國の地震とその予言」(日本道教学会『東方宗教』第百二号、2003年)参照。

7) 順帝陽嘉二年六月丁丑、雒陽宣德亭地坼、長八十五丈、近郊地。時李固對策、以為「陰類専恣、將有分離之象、所以附郊城者、是上帝示象以誡陛下也」。是時宋娥及中常侍各用權分爭、後中常侍張達・蓬政與大將軍梁商爭權、為商作飛語、欲陷之。(『續漢書』五行志四)

地震から神秘的解釈ではなく現実的思考を促したということである。

また、これほど科学の発達した現代でも、天体と違って地震は予測できない。予測できない災異は少なくないが、とりわけ地震は最も予測不能で突発的であるため、現実社会の不正や腐敗を糾弾する体制批判として生き続けた。

「陰陽調して風雨時あり，羣生和して萬民殖^{そだ}ち，五穀孰^{みの}りて艸木茂り，天地の間，潤澤を被りて大いに豊美す」（『漢書』董仲舒傳）という災異思想は、地震もまた、自然の摂理を無視した人間界に反省を促しながら健全に継承されていたというべきであろう。もちろん、それで災異がなくなる訳ではない。とは言え、少なくとも災害は仕方のないことではなく、人々が災害を通して権力機構に踏み込む鋭い政治批判をしたこと、自然災害の政治的責任追及を促した画期的な政治学といえよう。

ところで、中国を最先進国として思慕し、その文明に学ぶことを使命として来た日本、漢字を導入して中国の文物に学び、社会の制度も文化も取り入れたはずの日本であるが、孟子の革命思想と災異説は受容されなかった。

天文学は、『日本書紀』によれば推古十年（602年）には伝わっていた。しかし、これを伝えたのが仏教僧であったため、天文や暦、あるいは占星術はもっぱら仏教文化の一部として受け入れられたようだ⁸⁾。そして、天文学の担い手が僧侶であったこと、さらに、当時の日本に天文学の専門家を育てるだけの文化的基盤がなかったことなどから、天文観測も占星術も、貴族の政争に利用されたこともあったが、ついに日本社会に定着することはなかった。

災異説については、陰陽道^{おんみょうどう}という日本独特の呪術へと変容していった。ただ、日本の陰陽道は個人が災厄を逃れ幸福を得るための吉凶占いであって、災異説のように天変地異を天の統治者への譴責として解釈するものではなかった。そのため日本で自然災害による被害が出て、日本人は政治的責任を追及するよりも、「自然現象だから誰のせいでもない」として諦める傾向が強いのではなかろうか。

近年、世界は異常気象に見舞われている。想像を絶するほどの自然災害は東日本大震災だけではない。近代科学はこれを環境破壊による地球温暖化を以て説明するが、環境破壊とはひとえに人類のもたらしたもので、自然界と人間界との調和を無視した近代政治の負の遺産であることは周知の事実である。ところが、社会の「進歩」と「発展」を理由に、この事実から目をそらそうとする。危険で不安一杯の原子力発電所も、それがなければ今の生活は維持できないという理由で稼働させている。すべて「現実」を理由に理想を放棄しているのではないか。今、災異説は非科学的な神秘思想だとして一笑に付すのではなく、改めて、「心を正して以て朝廷を正し、朝廷を正して以て百官を正し、百官を正して以て萬民を正し、萬民を正して以て四方を正す。四方正しければ、遠近、敢えて正に壹ならざる莫く、而して邪氣、其の間を奸す者有る亡し」（『漢書』董仲舒傳）を問い、天変地異について考える好機といえ

8) 細井浩志「日本古代国家による天文技術の管理について」（『史淵』No.133, 一九九六年）、細井浩志「天文道と歴道」（林淳・小池淳一編著『陰陽道講義』嵯峨野書院、二〇〇二年）を参照。

よう。

(2011年12月16日受理)

Reconsidering Social Phenomena Based on Natural Disasters

Hisaharu KUSHIDA

In recent years, extreme weather has been affecting every corner of the world. The frequency of natural disasters is unbelievably high. Such disasters cause great damage to homes and property, with many people dying as well. Modern science has tried to explain the increasing frequency of extreme weather events with the theory of global warming. However, human activities impose the majority of threats to nature. Most environmental degradation results from modern political maneuverings, which ignore the necessary harmony between nature and human societies. This connection has been continuously proven. Nonetheless, world leaders still do not seem to understand the causes of nature's destructive forces.

The history of natural calamities is as long as the history of human beings. In ancient China, when science was still being developed, natural disasters were called "calamities from Heaven" (天禍). People then believed that *tian* (天) has a will of its own and that it can send messages to the human world. If the state's politics are functioning properly, society is stable and people live comfortably, and *tian* sends auspicious things down to earth. On the other hand, if a state practices bad politics and causes its people to suffer, *tian* will reproach the leader by creating disasters and irregular natural phenomena. Ancient China believed that in addition to natural disasters such as earthquakes, floods and drought, other phenomena such as eclipses of the sun and moon, irregular movement of the planets, and the appearance of comets and meteors are also *tian*'s reactions to tyrannical rulers in human society.

Ancient Chinese views on nature that emphasize the interactions between nature and humans are often considered irrational and unscientific. People laugh at such views and cast them aside. However, it is also true that if human beings look at natural calamities as warnings from *tian*, then any changes in nature would lead us to reflect on our society and scrutinize our politics. The *Zaiyi* theory (災異說), based on such a view of nature, could be used to check the abuse of power and watch the leader's behavior. This theory demands serious scrutiny of the leader's political responsibilities and forces him or her to be self-critical about employing corrupt politics.

The 9.0-magnitude earthquake that struck on March 11, 2011 off the Pacific coast of northern Japan, or Tohoku (東北地方太平洋沖地震 *Tōhoku chihō Taiheiyo oki jishin*), caused not only the great tsunami but also the ongoing crisis at Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant.

Japanese people have suffered tremendously in this disaster, beyond anyone's imagination, but patience is a virtue among most people in Japan. Japanese people have learned to accept natural disasters as their fate, and feel that politicians cannot take responsibility for natural disasters. At

the same time, however, we should realize that poor politics is also a fundamental cause.

Instead of easily rejecting the *Zaiyi* theory as simply mythical ideas of two thousand years ago, Japanese people probably should take a more serious look at their situation and reconsider politics in Japan as well as elsewhere in the world.